

小田原史談

第77号

発行所 小田原史談会
小田原市西栢山3310

文庫流れ 石井 富之助



明治以後小田原における近代図書館運動の発祥は非常に古く、しかも、それは小田原市民の思いも及ばぬ人によって、その第一ペーシがめくられている。

明治十五年、小田原、足柄上、下両郡の子弟で、東京へ遊学しあるいは卒業した者が集って函東会という会を結成した。はじめのうちは主として意見を交換し会員相互の親睦を深めるためのものであったが、これだけではどうも会の運営がうまくいかぬ。それに意見の中には聞きすてるには惜しいものがあるというところで、機関誌を持つとういうことになり、明治二十二年十月二十九日に創刊されたのが「函東報告誌」である。

現在、小田原には郷土史研究者が相当おおいいて

それぞれ貴重な研究を発表されているが、不思議なことに、われわれに最も身近な明治以後の研究はほとんど見かけないといつてよいこれは資料が案外少ないところに原因があるかも知れない。

明治以後のまとまった資料としては片岡永左衛門氏の「明治小田原町誌」を第一に挙げなくてはならないが、この「函東会報告誌」も極めて重要な資料といえる。

わたしの持っていた報告誌（現在は図書館に寄贈してある。）は明治三十一年十月発行の第四十八号の間幾冊か欠本がある。またであるが、これは北村透谷や書かざる作家といわれた坂本易徳なども編集していたことがあって、特異な性格を持つものであった

かりでなく、明治中期の郷土研究にいくたの資料を提示する点で、貴重な文献といえるのである。

この「函東会報告誌」第五号（明治二十三年二月発行）の雑報欄に次のような記事が載っている。読み易いように現代文になおしてお目にかかけよう。

一月五日のことであった。足柄下郡警察署長布野万長氏は伊藤（博文）伯の意を受けて、小田原新年会の席上で演説された。その大意は――。

伊藤伯が当地に住居される以上は、何事でも当地の利益になることをされる考えである。元來伯は多くの書籍を所蔵されているが、これをひろく衆人に縦覧させたいと思つておられる。したがって、ここに有志者があつ

て一軒家を借り受けるかあるいは適當の場所を構えて充分監督保護をするならば、伯は喜んでその所蔵の書籍を貸与せられようであろう。というのである。おそらく伯は小田原地方の教育の奮わないのを心配してこの好意を寄せられたのであろう。

有志者はこれにどうこたえようとするのか。まだ何も聞いていないが、望みたいことは、すみやかに小文庫を開設し、二人の番人を置き、教育会もしくは学校でこれを管理し、同時に小田原の人で古文書を蔵されてる人も、ただいたずらに倉庫の中に横んでおいてねずみのすみかにすることなく、また深く箱の中にしまひこんでしみの腹をふくらますようなことをせず、この文庫に貸して衆人の利用に供する

ならば、その公益がどれだけ大きいかはかり知れないものがある。伯の好意に感謝し、有志家の奮発を祈る。

一読して、雑報子の感激と熱情が伝ってくる。それから八十年も経った今日、市民の図書館に対する認識も深くなり、資料を寄贈し提供する人も増えてきたがまだまだ後生大事に抱えこんでいる人も相当いるところを見ると、この雑報子の言は今もなお新しさを失っていないといつてよいようである。

伊藤博文が前記のような好意を示したのは、滄浪閣に移り住んだ翌二十三年の新年会においてのことだったが、このように伊藤博文によって投ぜられた一石は当然波紋をおこさずにはいかなかった。

小田原を中心として足柄下郡内における教育振興に志あるもの百三十二名（明治二十二年現在）をもって組織された函左教育会は、二月九日、華女学校で開催された第五回総会にこの問題をとりあげ、満場一致で小田原町内に書籍館のようなものを創めること及びその方法の議題は、満場の賛成でこれを創立することに決し、その方

法手続等は幹事がこれ进行研究すること。

を議決し、幹事の改選を行った結果、上原閑次郎、戸次政恒、笠原尚衛、志摩勝富、秋田源之丞の五氏が再選された。

こうして、小田原最初の図書館は「小田原文庫」と名付けられ、設立準備が進められたのであった。

ここで当時日本の図書館はどんなありさまであったか一顧してみよう。

明治時代に入って、学校教育は政府の積極的な施策によっていちじるしい発達をとげたが、図書館事業ははなはだ閑却され、わずかに明治五年に官立図書館東京書籍館（後の上野の帝國図書館）ができたのみであった。明治二十二年に至りようやく図書館令が發布されたとはいふものの、設立についてなんの強制力もない、きわめて微温的なものであった。したがって、府県立では明治三十一年に京都府立、同三十六年に大阪府立が建てられ、市立では明治三十九年に東京市立図書館がやつのことで市民にお目見えしたのであった。

このような状況の中で、しかも府県立最初の京都に先だつこと八年の明治二十三年に、伊藤博文のお声が

相模国初期の国府と

国分寺の所在地はどこか

内田 武雄

かりにもせよ、小田原で図書館建設の準備が進められたことは、まことに驚異に値することなのであった。

ところが、「函東会報告誌」第十三号（明治二十三年十一月発行）で雑報子は

小田原文庫 文庫名はすであって、形はついに消えてしまった。好意を寄せられた伊藤伯は、くたの蔵書を深く秘めてまた出そうとしない。かつて「草紙洗」という言葉のあることを聞いたがまだ「文庫流」の語のあは。ことは聞かない。

と嘆じているのである。二月に設立を決議してから十カ月ばかりの間に、どういう経過をたどったかわからないが、小田原最初の図書館はついに流産し、伊藤博文は初代貴族院議長となり、十一月に小田原を去った。

今考えるといかにも残念なことだが、当時としては無理もないことであつたかも知れない。いやむしろ、人口一万五千の小田原町に全国にさきかけてこのような図書館運動があつたといふこと、それ自身小田原の文化史上特記すべき事柄といふべきであらう。（元小田原市立図書館長）

それはその時各宮の座席に付いてあらそう行事である。その時のスバイの役をつとめたのが足柄明神の二男と言われている。

（神祇庁本簿による）
石上宅嗣国司は自分の氏神と共にこの足柄明神の二男を相武、師長の合併記念として祀つ事も考えられる。

ともかく賀茂神社は、古くから皇室の尊敬厚く皇城（京都御所）鎮護の神と言われていた「新編相模風土記」に足柄下郡鴨宮村の古名は柳下と唱へり、是柳の老樹有りし故なり云々、今も小名、下鴨の一名を柳下と呼、又田間の字に柳添などと呼ぶるは、古名の遺れるなり。按ずるに（東鑑）

建久三年八月当国の神社に神馬を奉納ありし、其一社に柳下賀茂と載たるは、即村内賀茂明神の事なり、されは当時猶柳下と唱へし證なるべし。
源頼朝が政子夫人産氣の時、安産を祈って相模国神社に御参りした。建久

四年（一一九三）八月九日天晴静かな日であった。この時祈願された神社に御参りした。柳下

新日吉神社 柳田
大箱根神社 柳田
惣社 柳田
福田寺 酒匂
平等寺 豊田
範隆寺 平塚
常元寺 三浦
宗蘇寺 坂本
大山寺 日向
靈山寺 日向
酒匂大明神 二宮
冠大明神 三之宮
前鳥大明神 四之宮
佐河大明神 一之宮
八幡天満宮 平塚
五頭宮 平塚
黒部宮 平塚

以上である。
駅家は和名鈔では知れぬが、延喜式相模国駅馬の条下に、坂本二十二疋、小総箕輪、浜田各十二疋とあるのは、古下郡の西北端が坂本駅、古上郡の西南端が小

総駅であったことを示すものである。駅の敷へ方は、通例都を標準としているから、西から東への順で、箕輪以下は東方隣郡になるのである。
小総は今の酒匂であらう。駅路について坂本は今の関本と言われている。道順は坂本駅から飯田へ出てサクラファイルムの前から中曾根の酒匂川の土手に出るこの所に地蔵様が祀つてある、この所の地名を衛府（関所）とよんでいるたいへん広い場所である。ここに第一の関所があつたのであらう

の中庭の氏神様の一宮の前を通って飯泉の田中前に出る。ここに衛府畑けと言ひ地名がのこつてゐるのは、確ても門衛府があつたのは確かであらう、こもたいへん広い場所である。このすぐ上の地名が石上台で先にのべた、石上宅嗣天平宝字元年六月相模国、国司の住んでいた所と言われている。先きのべた田中部落の人々がこの門役人であつたろう。このすぐ東側に矢作の浅間神社がある。道はそれより東に進み、道上町、道下町の間を速り下堀に出る。この部落はちいさいが四方に堀をめぐらしてあるところから、あるいは奈良時代の国府の米倉があつたとも考えられる。下堀の八幡神社の前を高田の衛府に出ると、こもそうとう広い所でも田が五、六反ぐらいの衛府と言ひ地名が付いている。衛府の出口は今でも出口と言ひ、衛府の入口は今でも関口と言ひ地名が残つている。この所が左衛門府の跡であつたのであらう。これより道を南に

とて酒匂宿に出る。酒匂宿と言つてもその時代は今小田原食品市場のある、国道一号线になつてゐる付近に酒匂宿は西から東に向つてあつたものと言われている。

とて酒匂宿に出る。酒匂宿と言つてもその時代は今小田原食品市場のある、国道一号线になつてゐる付近に酒匂宿は西から東に向つてあつたものと言われている。

とて酒匂宿に出る。酒匂宿と言つてもその時代は今小田原食品市場のある、国道一号线になつてゐる付近に酒匂宿は西から東に向つてあつたものと言われている。

とて酒匂宿に出る。酒匂宿と言つてもその時代は今小田原食品市場のある、国道一号线になつてゐる付近に酒匂宿は西から東に向つてあつたものと言われている。

「舞台」という地名

舞台と言ひ地名は酒匂と国府津の二カ所所あり、酒匂の場合は今のミノヤ（美濃屋）のサービス・ステーションの所から上に十町ほど。

国府津の舞台は多田の肉屋付近十町ほどである。東海道舞太夫記には次のように出ている。
一、東海道側に連る、外に神事舞太夫二人住す、中村博進、同博右衛門、舞太夫頭、田村八大夫配下、広サ十町余、地名岸和田、岩和田、左田川、鳥羽太上皇（法皇）酒輪郷を箱根神社に寄進せられるとある。
八会報第七十五号「新田小史」に出て来る柏木次郎氏の「舞台」の語源であらう
内田武雄記

頼朝の旗揚げ

北条時政はそこで一たん馬をとめて佐々木の三兄弟を差し招いた。

「山本判官もさることながら、手強いのは判官の後見をしてる堤信遠と申す者この者を生かしておいては前日のたたりとなる。よってこれより道を東へとつてなんとかお許たちで、堤を討つてはもらえまいか」

本来なら、奇襲隊を二手に分ける所だったけれど、何分小人数のため、それが叶わぬ。そこで、佐々木三兄弟に因果を含めて、この難役を引受けさせた。

「あれにござる……堤の住居は……」

当時の武者は城だの塔だのを構えるほど進んでいなかったから、もっぱらおの館を岩がわりに使っている。といつてもせいぜい堀

や土塀をめぐらしているらしいのもので、この堤の住居などは、その堀すらないほんのささやかなものだった。

佐々木経高は、音吐朗々と名乗りを上げつつ、ヒョウと一の矢を切つて放つた矢は夜空を切つて進み、堤の住居の表戸に音高く突き刺さった。

これが頼朝の旗揚げ、鎌倉幕府創設のための第一弾文字どおり一の矢であったが、当人もそんな大それた自覚をもつていた訳でなく、射込まれた堤のほうでも、夢破られて、あわてて起き出してきたぐらいのことです。

その頃、北条時政を首謀者とする混成部隊が山木（八牧とも書いたという）の館前である天満坂にたどり着いた。

「それ目ざすは山木判官ぞ！」

北条が叫ぶ間もなく、若武者たちははてんで弓を引きはじめた。

きりに右往左往している。

いつもは百人をこえる郎党をもっているのに、今日は三島の祭礼へ赴いたついでに、黄激川の遊女を抱きに行ったものとみえて、古顔の連中が二十人ほど抜けているらしい。

「はい……」

「かならず兼隆の首を持ち帰るのじゃぞ」

こうして、佐々木たちは蛭ヶ小島の間道づたいに山木へと駆つけ、とうとう頼朝は一人になってしまった。

「盛綱！ いかげじゃ？ 煙はまだ見えぬか……」

「はい、いまだに……」

「それはよいが、差し当たりどうしたもののじゃろう」

「むろんかねての約定とおと落ち合ひ、その上で討手と戦わねばなりません」

「となると、東へ進まねばならぬのう……」

「もはやこの伊豆にはおれませぬぞ。もしぐずぐずしておつたら、背後より伊東が、前方より大庭が寄せきて、文字どおりの挟み打ち……」

「ならば一刻の猶予もならん、せめて今日中に土肥へ出るとしよう」

妻子を伊豆へやって身軽になつたためか、それとも緒戦を飾って勇気を得たゆえか、頼朝はすっかり元気づいていた。

「山木を討つた以上、もはや平氏に叛旗をひるがえしたことは歴然とならうゆえ今日よりは戦さにつく戦さを覚悟せざるはなりません」

「それはよいが、差し当たりどうしたもののじゃろう」

「むろんかねての約定とおと落ち合ひ、その上で討手と戦わねばなりません」

「となると、東へ進まねばならぬのう……」

「もはやこの伊豆にはおれませぬぞ。もしぐずぐずしておつたら、背後より伊東が、前方より大庭が寄せきて、文字どおりの挟み打ち……」

「ならば一刻の猶予もならん、せめて今日中に土肥へ出るとしよう」

妻子を伊豆へやって身軽になつたためか、それとも緒戦を飾って勇気を得たゆえか、頼朝はすっかり元気づいていた。

「山木を討つた以上、もはや平氏に叛旗をひるがえしたことは歴然とならうゆえ今日よりは戦さにつく戦さを覚悟せざるはなりません」

約五十騎ばかりが肅々と北上を開始した。

「もう再びこの小天地に戻ることはあるまい。」

頼朝は何度も振り返つた勝てばもつと広い天地に居を構えることになるだろうし、負ければ狭い墓穴に亡骸を納めねばならないのだそう思つて見るせいか、蛭ヶ小島のあたりに一むらの薄雲が翻引いて、なんだか別れを惜んでいるかのように見受けられる。

「賽は投げられた……。はたしてどんな目が出るから、それは誰にも分からない。彼はもう伊豆山に着いているはずの政子に使者を送つて山木を討ち平らげたことを知らせてやつた。」

山木兼隆は、政子を妻にと望んで危うく政子を祝言の席に坐らせようとした人物であつて、いわば頼朝の恋仇といつてよかつた。その邪魔者を、今討ち滅して

もうわれらの仲を妨げるものはなくなつた。よつて今後のため、仏の加護を願うてくれるようにと、頼朝はそこでも神仏にすがらねばおれない身の上的ゆえに訴えかけている。

そして、彼ら謀反人の群れは、小田原の西方にある土肥郷にたどり着いた。そ

こは真鶴岬のつけ根に当たつていて、この半島は、箱根火山の熔岩が流れ出でてき上がった熔岩台地であったから、全体にごつごつして海岸線は出入りが多く、半島は楠の巨木に覆われて、昼なお暗かった。

ところで土肥実平は四人兄弟で、長兄は中村太郎重平、次男が実平自身で、三男は平塚の近かくに住む土屋三郎宗遠、四男が二宮に居住して二宮四郎友平とい

った。そこで妹が三浦半島の豪族三浦の一族である岡崎義実と嫁いでいたため、岡崎と土肥実平の二人が、岡崎頼朝の所へ入りして、とうとう旗揚げに加わる事になってしまった。

相模灘が、その日もきらきらと光り輝いて、彼らは潮の香に酔っていた。

けれど、平地にぐずぐずしては追いつて立てられて一たまりもないことになるから、一刻も早く要害の地を探さなければならぬ。

「それならば石橋山が何よりござる……」
地理に詳しい実平の献策によつて、今では三百騎ばかりにふくれ上がった頼朝軍は、高さ六十メートルばかりの石橋山に陣を布くた

め、やがて山坂をよじ登り

はじめた。

登るにつれて海がふくれ上がつてくるようである。眼下に一望千里の大海原がひらけて、一斉に金波銀波を織りなしている。この小

【橋地区の民話】

竹見 龍雄

曾我五郎の七つ石

中村の郷は六本松峠を界にして曾我の里と接している。曾我兄弟は親の仇工藤

祐経を討つた二人で何十人いや何百人もの者と戦う心構えから常に武術の練習に、寝ても起きても勉めていた。

或時第五郎が病に懸つて回復したが、どの位力があるか試さんものと六本松峠

に登つて、そこにあったかという重さ何百斤もある大石を中村方面に向かって力一ぱい投げた、ところが、その石七つが六本松から直線にして、なんと三軒もある小竹村の現石「七つ石」にまともたつて落ち、最後の

一つだけがその手前の小竹赤坂台に落ちたとい。唯今も小竹には昔から地名にもなっている。

「七つ石」に直径一米以上の而かもその目方何百斤

丘もやはり熔岩から出来ているのだろうか、黒っぽい山肌が何やら不気味であった。(邦光史郎「幻の旗」より)

もありそう大石が十数個もあつて、五郎の投げた石と言ひ伝えている。

而かしこの石は私の付近に古墳があつたことから太古の古墳の石ではあるまいかと推定している。

十郎と虎御前

泣き別れの
中里さんざい

大磯の宿はその昔港であつて、多くさんの遊女が居たが、その為か鎌倉武士

の面々が馬を飛ばしてこの大磯宿を夜な／＼遊びに参つた。そこで曾我の兄弟はその大磯に行けば仇工藤の

様子が判明するのではなからうかと、毎夜大磯に通う内、兄十郎は虎女に第五郎は化粧坂(けいざか)の少将と相愛の仲となつた。ところが建久四年夏五月

いよ／＼富士の巻狩に仇工藤も御大将頼朝のお供して行くことが確認されたので

兄弟は先に裾野に参つて「勢子(せこ)」になる為曾我の里を去る。命は本懐を遂げても捨てる覚悟、このことを如何なる者にも口に

出す兄弟ではなかつたが、兄十郎はその前夜虎女の所

に参つて虎女の膝枕で横になつたが、之が最後かと思

う心からか終に目頭に涙を浮かべた。之を察した虎女はその夜は特にもてなし

を良くして帰る時、この小竹村の中里さんざい(これは曾我兄弟物語にある様に

正規な鎌倉街道ではなく裏道である)まで送つて来て

二人泣き別れたと言ひ伝え

る。

尚それ以来この土地を所有するとその家に何か不幸なことがあると伝えられて来た。

昔は松林であつたが唯今は二宮団地の小田原市との界となつて居る。

尚曾我兄弟大磯通いの伝説はこの中村には数多く残つていて、明沢の地名は兄弟が大磯から帰る時と夜が明けたから。又その明沢の古

道には古い井戸があつて兄弟顔洗いの井戸と伝え、又二宮町釜野には兄弟の乗馬

がそこを通ると必ず「いななく」これが訛つて現在その地を「いな久保」と呼んで居る。

ゴリラの体重は二十五、六貫、チンパンジーは十二三貫、そしてオランウー

タンは五、六貫程度の様です。あらゆる角度から調べると人間はオランウータンに一番良く似ていると言うのです、いや失礼、オランウータンが人間に似ている事になるらしい。

或日私は人間の尾骨が一寸程延びているのを見せられた、即ちそれを証明するため、其の人をうつ伏せにして尻の尾骨に空缶をかぶせて置き、それが意志よ

雑談

井上英一

(日記より)

ので今度は小人の話をしませう。

「エスキモー楽団来る」の広告がチラホラ街角に貼つてある、そこで早速見に行く事となつた、これが有名な小人楽団である。

一行は二十人位で何れも小さな人はかり、背は四尺たらず、しかし声量は豊富な事といつたら正に驚きの外はありません。

実に堂々と大歌劇を演じて初め見た我々は何れも驚かせるを得なかつた。その劇はクレオパトラとアントニーの場面で、すっかり

彼等の術のとりこになり喝采につぐ喝采で観客一同は小人の島にいるような錯覚に落ち入つたのであつた。

私はつく／＼、思う、それは人間の大きい小さい等の事で価値の差別をつける可きではない。と全く良い教訓を受けた。

面白い話もあるものだと皆様方お思いでしょうが、全くこれ等は真実にあつた事故ごに書いた次第です